

自己の課題を見つけ、競い合う楽しさや伸びる喜びのある授業を目指して

岡山県久米郡美咲町立柵原東小学校 清友 信吾
岡山県苫田郡鏡野町立奥津小学校 牧 雄一

1 研究テーマについて

久米苫田支部は岡山県の北部に位置し、小規模校の多い地域である。複式や異学年合同体育を実施している学校も多い。各学校の児童数が少ないため、個に応じた指導は行いやすいが、一方で人間関係が固定化したり、児童同士が関わり合い交流する機会が減ったりしている。研究をすすめる中で、体育科の授業においても、仲間と競い合う楽しさや課題解決に向けて試行錯誤しながら共に伸び合う喜びを実感する機会が少なく、意欲的に運動に挑戦し続ける子どもの姿が見られにくいという現状がある。また、地域環境の要因からスポーツ少年団などの社会体育も衰退傾向にあり、仲間と運動する機会が年々減ってきているという現状もある。

このような地域特有の課題を乗り越えるためには「仲間との交流」をより充実させることが大切ではないかと考えた。そこで、ICT（chromebookの「Google Classroom」、 「Google Meet」）の活用に着目した。自校だけではなく、他校の仲間とも互いに競い合ったり、練習方法や場の設定を紹介し合ったり、アドバイスし合ったりすることができるようにする。そうすることで、仲間と競い合う楽しさや共に伸び合う喜びをより実感することができ、子どもが「運動が楽しい。」「記録が伸びてうれしい。」「もっとやりたい。」と運動に挑戦し続けることができるのではないかと考えた。

以上より、本研究では「自己の課題を見つけ、競い合う楽しさや伸びる喜びのある授業を目指して」と研究テーマを設定し、走り幅跳びの実践に取り組んだ。

2 研究の視点

「仲間との交流」をより充実させ、運動に挑戦し続ける子どもの育成を図るために、以下の2つの視点が必要であると考えた。

(1) 自校の仲間との交流が充実する工夫

本単元では、第1時に計測した自己の記録から何cm記録が伸びたかを目指す「走り幅跳びゲーム」を設定した。そうすることで、踏切地点から着地地点の距離を仲間と比較するのではなく、「より遠くに着地して記録を伸ばしたい。」「記録を伸ばすためにはどうしたらよいか。」などと自己の記録に目を向けたり、自己の課題を追究したりしやすくなる考えた。また、自己だけではなくチームで練習の場を工夫しながら活動したり、チームの伸びの平均値（チームの仲間全員の伸びの合計値を人数で割った値）を競ったりする学習活動を取り入れることで、お互いに見合ったり、アドバイスし合ったりしようという他者意識が働きやすくなる考えた。

(2) 他校の仲間との交流が充実する工夫

2, 3校の仲間と記録を競い合ったり、記録を伸ばすために互いの考えを伝え合ったりする交流を行うために、「Google Classroom」と「Google Meet」を活用する。「Google Classroom」では、授業中の互いの取組を撮った動画や現在の各校の記録を「Google Classroom」上で共有し、いつでも見合うことができるようにする。また、「Google Meet」では、リアルタイムで他校の仲間と練習方法や場の設定を紹介し合ったり、お互いの走り幅跳びの行い方をアドバイスし合ったりする。この2つのアプリを活用することで、「他校よりも記録を伸ばしたい。」「〇〇の練習の場を取り入れたい。」と挑戦意欲が喚起されたり、「記録を伸ばすためには〇〇に気をつけて跳んだらよさそうだ。」と新たな考えに気づいたりすることができる考えた。また、交流する回数も「顔合わせの会」、「各校の現在の記録を伝え合う会（中間結果や最終結果）」、「互いの取組を紹介し合ったり、アドバイスし合ったりする会」など複数回設ける。そうすることで、他校の仲間と関係を築いたり、他校の記録を越えたいという思いをもったり、新たな考えに気づいたりしてさらに子どもの挑戦意欲が持続すると考えた。

3 単元について

(1) 単元名 「仲間と協力しながら、跳び方を考え、記録を伸ばそう！」 - 5, 6年生 -

(2) 単元目標

○ 走り幅跳びの行い方を理解するとともに、試技の回数や踏切ゾーンの設置などのルールを決めて競争したり、自己の記録の伸びや目標とする記録の達成を目指したりしながら、リズムカルな助走から力強く踏み切って跳ぶことができるようにする。 【知識及び技能】

○ 自己の能力に適した課題の解決の仕方、競争や記録への挑戦の仕方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えることができるようにする。 【思考力、判断力、表現力等】

○ 走り幅跳びに積極的に取り組み、約束を守り助け合って運動をしたり、勝敗を受け入れたり、仲間の考えや取組を認めたり、場や用具の安全に気を配ったりすることができるようにする。 【学びに向かう力、人間性等】

(3) 単元計画 (別紙参照)

(4) 単元の評価基準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習の取り組む態度
①走り幅跳びの行い方について言ったり書いたりしている。 ②7～9歩程度のリズムカルな助走をすることができる。 ③踏切ゾーンで力強く踏み切ることができる。 ④かがみ跳びから両足で着地することができる。	①助走、空中姿勢、着地など自己やチームの課題を見つけ、その解決のための練習の場を工夫している。 ②自己やチームの課題に適した練習の場を選んでいる。 ③行い方のポイントや仲間の動きのよさなどを見つけ、仲間に伝えたり、学習カードに書いたりしている。	①走り幅跳びに積極的に取り組みようとしている。 ②ルールやマナーを守り、仲間と助け合おうとしている。 ③走り幅跳びを行う場や設定や用具の片付け、計測や記録などで、分担された役割を果たそうとしている。 ④勝敗を受け入れようとしている。 ⑤話し合いをする際、仲間の考えや取組を認めようとしている。 ⑥場や用具の安全に気を配っている。

4 研究の実際と考察

【久米支部：「Google Classroom」を活用した授業の実際】

(柵原東小学校5年生12名と柵原西小学校5年生17名が交流。)

(誕生寺小学校5・6年生14名と弓削小学校5・6年生14名と神目小学校5・6年生19名が交流。)

○オリエンテーション

単元の導入時では、文部科学省が出している「小学校高学年体育～09 走り幅跳び」の動画を見ながら、走り幅跳びは「踏切地点から踏み切って跳び、より遠くに着地すること」を目指す運動であることを子どもと確認した。また、この単元では①最初に計測した記録から伸びた距離が自己の記録(例えば、最初の記録より最高記録が15cm伸びたら『15点』が自己の記録。)となる「走り幅跳びゲーム」を行う、②チームの伸びの平均値を自校のチーム同士で競う、③自校の伸びの平均値を他校の伸びの平均値と競うことを伝えた。「走り幅跳びゲーム」や「チーム同士で競う」、「他校と競う」ことを聞いた子どもは「おもしろそう。」「早くやりたい。」と反応していた。子どもの期待感が高まったところで、最初の記録を計測した。

○自校の仲間との交流

各時間の導入時に「より遠くに着地して自己やチームの得点を伸ばすためにはどうしたらよいか?」と問い、学習カードに自己の課題を書く活動を設けた。子どもは「力強い踏切を意識する。」「手を上げて高く跳ぶ。」などと書いていた。チームで練習する時には「〇〇を意識して跳ぶから見て欲しい。」「記録を伸ばすために高く跳びたいからダンボールを重ねた場で練習したい。」などの発言をしており、自己の課題を意識しながら活動する姿が多く見られた。また、チームの得点を伸ばそうと「目標の距離の位置に目印になる紐を置いたらいいよ。」「跳ぶ時にもう少し足を上げた方がいいよ。そのためにペットボトルにゴム紐をつけた道具を使ってみよう。」「目線を高くするために、砂場の向こうに立っているから私を見ながら跳んでみて。」などと仲間とアドバイスし合いながら活動する姿も見られた。(資料1)記録タイムで仲間の



【資料1：用具を工夫して練習する写真】

記録が伸びた時は「やった。最高記録が出た。」「記録が伸びたのは〇〇さんがこつを教えてくれたからだ。」と喜び合っていた。

○他校の仲間との交流

自校の記録が伸び悩んできたり、跳び方に関する新たな気づきが出にくくなったりして、活動が停滞してきたタイミングで、他校の記録を見せた。(資料2) すると思わず「今は負けている。勝ちたい。」と口々につぶやき、くやしがる姿が見られた。そこで、「自分達の記録をさらに伸ばすために他校の仲間の跳び方を見てみないか。」と提案し、共に動画を見た。そして「他校の仲間の跳び方でいいところはどこかな?」と問うた。すると、「音がなるほど力強く踏み切っていた。」「助走の最初は大腿でゆっくり走り始め、徐々にスピードを上げて、最後は小股で踏み切っていた。」「空中で足が前に出ている。」と発言があった。そこでさらに、「空中で足を前に出すと何かいいことがある?」と問い返した。子どもの発言から「着地の時に体が『ん』の字になるように足が前に出ると記録がさらに伸びそうだ。」と共有した。その後の活動の様相を見ると、助走の最初は大腿でゆっくり走り始め、徐々にスピードを上げて、最後は小股で踏み切ったり、着地の時に足を前に出そうと意識したりして何度も練習に取り組む姿が見られた。また子どもの振り返りを見てみると「他校の仲間の跳び方を真似すると記録が伸びてうれしかった。」「他校の人の記録を目標にすると、新記録が出た。次は〇〇を意識して跳びたい。」「他校に勝てるようさらに記録を伸ばしたい。」などと書いていた。

最終結果は惜しくも他校には敗れてしまった。しかし、得点の伸び方に目を向けると、中間結果時の得点は15.08点、最終結果時の得点は35.58点となり、他校と交流した後の方が約20点(記録の平均値が約20cm伸びた。)向上しており、子どもはととても喜んでいました。(資料3) 仲間との交流を充実させたことで、最後まで挑戦意欲をもって走り幅跳びに取り組む姿が見られた。

【苫田支部：「Google Meet」を活用した授業の実際】

(令和4年度 鶴喜小学校5年9名と大野小学校5年生15名が交流。)

(令和5年度 鶴喜小学校6年9名と奥津小学校5,6年生15名が交流。)

○オリエンテーション

単元の導入時に「Google Meet」を活用し、他校とリアルタイムで交流した。自己紹介を行ったり、これから走り幅跳びの授業を一緒に行うことを伝えたりした。初めて出会った仲間との交流は最初こそ緊張した様子であったが、授業が進むにつれ、会話が増えたり笑顔が見られるようになっていって、互いの心の距離が縮まっていった。また「走り幅跳びゲーム」を行い、自己やチームの記録の伸びを目指すことを伝えると、「おもしろそう。」と興味を示していた。

○自校の仲間との交流

単元の序盤に自己の課題を見つける活動を行った。「小学校高学年体育～09 走り幅跳び」の動画と跳び方とチームのメンバーで「chrome book」を使って撮り合った自己の跳び方を見比べた。そして自己やチームの記録を伸ばすために、それぞれの課題を「助走」「踏み切り」「空中姿勢」「着地」の4つの視点から選んだ。さらに、仲間がもった課題をチーム内で共有する時間を設けた。そうすることで、互いの課題に合った練習の場を選びやすくした。その結果、チームで練習する時には、「〇〇を意識して跳ぶから見て欲しい。」「踏切を合わせるには、練習する時にケンステップを置くといいよ。」「空中で手を上げた後に着地で体が『ん』の字になるために最後は手を前につき出したほうがいいよ。着地点に私が手を出しておくから最後にタッチしてみて。」などと互いにアドバイス合いながら活動する姿が見られた。自己やチームの記録が伸びた時は「やった。記録が伸びた。」と喜び合ったり、「早く次の走り幅跳びがしたい。」と次時への期待を発言したりする姿が見られた。

○他校の仲間との交流

自校の記録が伸び悩んできたり、跳び方に関する新たな気づきが出にくくなったりして、活動が停滞してきたタイミングで、他校との2度目の交流を「Google Meet」を活用して体育館で行った。(体育



【資料2：他校の記録や動画を共有している写真】

初めの記録	最新の記録	伸び	最新の記録	伸び
255	300	45	300	45
250	270	20	310	60
250	250	0	250	0
240	256	16	290	50
230	230	0	300	70
240	270	30	282	42
280	315	35	350	70
350	350	0	380	30
260	260	0	260	0
280	280	0	280	0
190	195	5	210	20
270	300	30	310	40
		15.08333		35.58333

【資料3：中間結果時(左)と最終結果時(右)の写真】

館で行うことで、Wi-Fiがつながりやすくなったり、ICT機器への影響が少なくなったりして交流がしやすくなる。)まず、大スクリーンに映像を映して、両校の練習の場を紹介し合った。(資料4)自校では行っていない練習の場があった時には「記録を伸ばすために〇〇の場で練習してみたい。」などのつぶやきがあった。その後、3人チームに分かれて、(A校から1人、B校から2人がチームになる。事前にチームごとに「Google Classroom」を作成し、その中の「Google Meet」でリモートをつないだ。そうすることで、1人1端末で他校の仲間と交流することができるようにした。)互いの跳び方を見てアドバイスし合う活動を設けた。(苫田支部では今まで「より遠くに着地する」ために、走り幅跳びの一連の動きをこれら4つの視点に分けて、研究を進めてきた。そのため、課題解決するための視点を両校とも4つの視点で統一することで、互いに見合ったり、アドバイスしたりする時の視点が定まり、交流がよりスムーズにいくようにした。)すると「私の課題はどこか見て欲しい。」「踏み切りが弱いからもう少し強くした方が遠くまで跳ぶことができるよ。」とアドバイスしたり、「空中姿勢で手をあげるタイミングがわからない。やってみせて。」「わかった。私がこれからやって見せるね。」と実演して伝えたりする姿が見られた。また、「〇〇さんの助走がぴったり合っていてすごい。」「着地が『ん』の字になっていていいね。」などと互いの良さを認め合う姿も見られた。子どもの振り返りを見てみると「自分達では気づかなかった練習の場が知れた。試してみたい。」「他校の仲間が跳び方をアドバイスしてくれたから記録が伸びてうれしかった。」などと書いており、他校の仲間との交流を通して、伸びる喜びを実感していた。交流後の活動も新たな気づきを基に、何度も走り幅跳びに取り組んでおり、挑戦意欲が単元の最後まで持続していた。



【資料4：「Google Meet」を活用して他校と一斉に交流している写真】



【資料5：「Google Meet」を活用して個人で他校の仲間と交流している写真】

5 成果と今後の課題

【成果】

単元を通して、「他校に勝ちたい。」「自己の記録を伸ばしたい。」「自校や他校の仲間からアドバイスをもらったら記録が伸びてうれしかった。」などと競い合う楽しさや自己の記録が伸びる喜びを感じながら走り幅跳びに挑戦し続ける姿が見られた。これは「仲間との交流」が充実するよう、以下のような手立てを講じていった結果であると考える。

(1) 自校の仲間との交流が充実する工夫

「走り幅跳びゲーム」を設定したことで、「より遠くに着地して記録を伸ばしたい。」と自己の記録の伸びを目指して、どの子どもも単元の最後まで挑戦し続ける姿が見られた。また、チームの記録の伸びを目指す学習活動を取り入れ、練習の場を工夫することができるようになったことで、必要感のある仲間との交流が生まれ、共に伸びていく喜びを実感することができたと考えられる。

(2) 他校の仲間との交流が充実する工夫

ICTを活用して他校の仲間と交流する機会を設けたことは、小規模校が多い地域で勤務する我々にとって最大の収穫となった。人間関係の固定化によって、学習中は発言する人と聞く人が常に決まる傾向があった。しかし、他校の仲間と交流することで、この人間関係の固定化が崩れる瞬間が多く見られた。その結果、「他校よりも記録を伸ばしたい。」と競い合ったり、「～な跳び方をしたらよさそう。試してみたい。」と新たな気づきを得たり、「〇〇さんのアドバイスのおかげで記録の伸びてうれしかった。」と共に伸び合ったりすることができたと考えられる。このように、活動を通して競い合う楽しさや伸びる喜びを実感することができたからこそ、「とても楽しい。」「もっとやりたい。」と単元の最後まで子どもは走り幅跳びに挑戦し続ける事ができたと考える。

【今後の課題】

ICTを活用した他校との交流は大変有意義だったが、授業の時間数や交流の時間を合わせるなどスケジュール管理が大変だった。録画機能・写真での交流など新たな手段を試していく必要がある。今後、「いつでも」「どこでも」「誰でも」より簡単に交流することができるようにするための工夫が必要であると感じている。さらに、体育科だけでなく他教科でもICTの活用を進めることで、小規模校が多い地域の課題を解決していきたい。